

パネル発表

特別パネル

翻訳学と言語教育

—複数のことばたち—

佐藤＝ロスベアグ・ナナ（ロンドン大学 SOAS）、田辺 希久子（神戸女学院大学）、アングルス ジェフリー（ウェスタンミシガン大学）

本パネルでは新しい学問領域である Translation Studies の研究者 3 名が、それぞれの専門分野（文化翻訳、翻訳教育、文学翻訳）から、Translation Studies が言語教育に貢献できる可能性について探求する。

日本における言語の複数性と Translation Studies

佐藤＝ロスベアグ・ナナ
SOAS, University of London

要旨

本稿においては、現在、西洋を中心に活発に展開しているトランスレーション・スタディーズを視野にいれながら、言語教育の中で翻訳という実践を用いて、教員と学生がともに言語の複数性について学べる可能性について論じていく。まずは、翻訳の価値ということについて言及し、翻訳はただの副次的なテキストではなく、翻訳にはつねに翻訳家の声が反映されていることについて明示する。その後、アイヌ出身の作家である鳩沢佐美夫が書いた自伝的な小説「証の空文」を取り上げ、言語の複数性を考える上で、いかに鳩沢の小説を翻訳することが有効なのかについて論じる。この翻訳不可能ともいえる鳩沢の描く世界を翻訳しようとすることによって、実は、翻訳家たちは、言語の複数性に気付くだけではなく、言葉以上の多くのことを学ぶのである。

【キーワード】トランスレーション・スタディーズ、翻訳、言語の複数性、マイナー文学

1 序文

AJE の年次大会で招待パネルとして呼んでいただき、田辺希久子氏、Jeffrey Angles 氏とともに「翻訳学と言語教育—複数の言葉たち」というタイトルで発表を行った。発表の際執筆者は、パネルの導入部的な役割を担っていたために、発表原稿をそのまま活字化するのは難しいと考え、AJE のジャーナルに掲載す

るにあたって内容を変更したことを予め記しておきたい。

Translation Studies (TS)は1980年頃から西欧で活発に展開をみせてきた学問である。西欧起源の学問ではあるが、その後、アジア、アフリカ、アラブ世界へこの学問は伝搬をしてきた。ところが翻訳大国である日本ではまだこの学問は市民権を得ておらず、英語教育を促進するためのツールのように、英語教育の一環として通訳や翻訳というコースを設置している大学がほとんどである。コミュニケーション学科や文学研究科などでも翻訳論を用いている講義などはあるが、概して部分的であり、西欧で用いられている学際的な学問としてのTSは日本ではほとんど根付いていない¹。それどころか、いまだに翻訳というものがテキスト翻訳のみを指し、翻訳を学問すると言っても「誤訳の指摘」や「唯一無二の素晴らしい翻訳ができるスキルを磨ける」ということを学ぶのだと信じている者も少なくない。しかし、西欧のTSには通訳分野も含まれ、それも会議通訳だけではなく、手話や医療通訳、法廷通訳などのコミュニティ通訳（パブリック通訳）の分野も含まれる。また映画のサブタイトル、機械翻訳、そして文化の翻訳といった「テキスト翻訳」という観点のみから翻訳を考えていると理解しにくいであろうトピックが多く含まれている。TSという学問に対する日本とほかの国々との温度差はどこから生まれてくるのだろうか。グローバル化という掛け声のもと、大学に対しても国から特別な資金などがおりもするが、実際にはガラパゴス化が言われ、日本語以外の言語というとまず英語となる日本教育の悪影響なのか、それとももっと根本的な問題なのか。紙幅の関係もあり本稿ではこのことについてはこれ以上論究しないが。

残念ながら、日本語教育に携わっている者の多くが、上述したような誤解をTSにしているようだ。翻訳に正しい一つの答えというものはあまりない。10人の翻訳家がいれば、同じ文章を翻訳すれば、10通りの個性を持った素晴らしい翻訳作品が出来上がる可能性がある。これは翻訳という行為が、いったん作者以外の、他者の身体を通して行われるからで、原作は新たにほかの言語へと生まれ変わるからだ。Hermans, Theoが指摘するように、翻訳の価値というのは、翻訳が媒介役として二言語の間に入り文化的な橋渡しをすることではなく、翻訳には必ず翻訳者の価値観が投入されていることにある（ヘルマンズ 2011）。

修士課程の実践翻訳のコースで、イデオロギー性の強い政治に関するあるイギリスの雑誌記事を院生に翻訳してもらったことがある。その翻訳について議論を行う時間になって、とある院生がその記事を日本語に翻訳することへの違和感を吐露した。選挙と政治にからみ、感情的に人を動かそうとするその記事を読んで、英語の記事のニュアンスをそのまま日本語に翻訳することに抵抗感があるという。この学生は、プロの翻訳家になった時に、自分が賛同できない内容の記事や原作でも、なるべく原文の空気を伝えるように翻訳しなければならないのかと悩んでしまったという。どのように翻訳するべきなのか、いずれにしても、翻訳家として非常に大きな責任が伴うことに困惑したようである。² 翻訳者も当然ながら道徳観や倫理観をもつ。そこに立てば、いくら職業といえども、そのまま翻訳をしたくないような内容を含む原文がでてくる。このような原文と、そして自分自身の倫理観と葛藤をしながら、翻訳者は自分の声を好むと好まざるとにかかわらず翻訳に織り交ぜていく。もし、ここでこの院生が

記事の内容は全く好ましくないが、なるべく原文にそって翻訳することを決めたとしたならば、そのように翻訳することにした院生の翻訳者としての判断がこの翻訳には反映される。

もちろんジャンルによっては翻訳家の存在が見えにくいものもあるが、しかし、他者が語ったこと、記したことを、自分の身体を通し、他の言葉に訳し発信するという行為は、実は非常に責任の重い業であり、原作の内容によっては大変な葛藤を生みかねない行為なのである。翻訳や通訳を行ったがために命を奪われた者もいる。院生はこの記事を翻訳することによって、その責任の重さを認識したと言う。実はそれがこの記事を翻訳させた教師としての狙いだったのであるが。

さて、TS に関しては、日本語でも翻訳書ではない研究書などが刊行されはじめている：井上健（2012）『翻訳文学の視界—近現代日本文化の変容と翻訳』、佐藤＝ロスベアグ・ナナ（2011）『トランスレーションスタディーズ』、早川敦子（2013）『翻訳論とは何か 翻訳が拓く新たな世紀』（あいうえを順）など、TS に関心がある方々にはそちらの書籍群を読んでいただくとして、本題に入りたい。

本稿においては、TS という学問のコースではなく、言語教育の場で翻訳という実践を通じて、翻訳は決してある言語からほかの言語へと言葉のみを移し替える作業ではないこと、そして翻訳を通じていかに言葉の複数性を認識し得るのか、ということを中心に、文化翻訳の領域に踏み込みながら論じていく。ここでは、「複言語主義」や「多言語主義」というイデオロギイとはいったん距離をおいて書いていく。

2 言語の複数性と小説の翻訳

複数言語という言葉が用いられる時、そこで想像される言葉は往々にして英語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、イタリア語、中国語といった国語（国の公用語）である。しかし、日本には上述したような国語を想定しなくても、日本語とは言語学的に異なるアイヌ語があり、また日本語の姉妹語とはいえ英語とドイツ語以上に異なると言われる琉球語などがある。国語群だけではなく、このような身近な言葉たちについてまずは考えてみることも、日本語教育を行う時には重要なことではないだろうか。単一民族一言語一国家という考え方が、想像の産物であったことは指摘するまでもないだろう。

例えば、1997 年には「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」が施行され、アイヌの言語や文化を守り継承することを促進することが日本の法律で定められたし、2008 年にはアイヌが日本の先住民族であることがほぼ公的に認められた。

本稿ではこのような問題意識をもとに、アイヌ出身の作家である鳩沢佐美夫（1935—1971）が書いた「証の空文」（1963）を取り上げたい。アイヌ出身の作家といえば、まず鳩沢の名前があがる。が、おそらく鳩沢も彼の作品もあまり知られていないと思うので、ここで、彼の簡単なプロフィールと物語の概要を記しておく。

鳩沢佐美夫は1935年に北海道沙流郡平取に生まれた。7歳のころから体調がわるく、9歳の時に脊椎カリエスと診断される。1959年に『日高文芸』のメンバーとなる。その後『日高文芸』に多くの作品を掲載していく。1971年37歳という若さで逝く。(鳩沢1995, pp.296-301)

「証の空文」は鳩沢と彼の祖母との自伝的な物語である。体が弱かった鳩沢は祖母に溺愛されて育つ。アイヌ語とその世界に生きていた祖母は、鳩沢に自分の世界の断片を日常の文化実践として見せており、結果的にその世界を伝えることになる。鳩沢は「アイヌ」ということを特に意識せずに育つが、小学校2-3年の時に祖母と一緒に駅にいと同年くらいの学童に「ア、アイヌだ」と指をさされ、鈍器でなぐられたような衝撃を受ける。この時はじめて鳩沢はアイヌだと「名指し」され、アイヌという意識が芽生えるのである。祖母はアイヌ女性が口元にする刺青のシヌエをしていたので、児童はそのことに気がついたのであった。それ以降鳩沢は、祖母と手をつなぐことさえも拒み、祖母とは距離を取るようになる。その後、祖母は離れに住むようになり引きこもりがちになってゆく。物語は紆余曲折を経るが、鳩沢は祖母が亡くなった時に、周りの偏見の目に流され、祖母との関係を冷たくしてしまった自分、そして、祖母をアイヌの古式で送れなかったことを悔やむ。この時、鳩沢は「民族」というものの虚構性を明確に認識するのである。

鳩沢の祖母はときおりアイヌ語を使っていたし、物語中にもアイヌ語が登場する。以下は鳩沢が祖母と山に青物を取りに行った時のことである。

あるときも、夕暮れ近くになって私たちは路を見失った。登りきるはずの山頂が、どこまで行ってもつかなかった。祖母は「その辺にチャイチャイのエヌイベイサン（小枝の切ったのなか）……」と言った。(鳩沢1963, p.11)

ここには日本語とアイヌ語という二言語の中で生きている祖母の姿が見える。それはバイリンガルというようなものではなく、むしろピジンに近い。しかしまぎれもなく複数言語の中で祖母は生きていた。

祖母はよく、山路を歩きながらヤイサマ（嘆きの唄）などを唄った。細い哀愁をおびた声は、深閑とした樹間に泉のようにしみ透った。私にはその唄の意味がわからなかった。(鳩沢1963, pp.11-12)

祖母はヤイサマと呼ばれる哀歌をよく唄っていた。もちろん祖母はアイヌ語で唄っていたのであるから、鳩沢には意味がわからなかったのである。しかし、鳩沢も複数の言語環境にいたことは明白だ。当時の多くのアイヌの人々がおそらく鳩沢や祖母のように複数言語的な環境の中で生きていたのであろう。

例えば、この小説を英語に翻訳するとして、アイヌ語に相当する言語は何だろうか。と考えれば、むろん、イギリス英語かアメリカ英語かカナダ英語かにもよるが、その目標言語における歴史的な背景も理解した上で、慎重に言葉を選択する必要があるのは説明するまでもないだろう。ネイティブアメリカンの言葉なのか、アイルランドの言葉なのか、カナダの先住民族の言葉なのか。

以下の文章は鳩沢の祖母が常に翻訳を介して暮らしていたことを示す。

これはときどきアイヌ語でなければ語れないような部分があると、祖母はまずアイヌ語でそれを話した。それから私たちが普段使う言葉で、説明してくれるのであった。(鳩沢 1963, p.10)

この文章には、アイヌ語の中に育った祖母が、翻訳を介して、孫たちとつながるしかなかった様子が描かれている。アイヌ語でなければ語れない部分とは、アイヌ語の文化的背景や世界観とより強くつながった内容であり、日本語の世界観では語りにくいことであったのだろう。

以下は鳩沢について悪い夢を見た祖母が心配になり、神々に孫の無事を祈る場面である。

あるとき早朝来たかと思うと、昨晚私のことで夢見が悪かった。したからハルイチャルパ(神仏に物を供えて祈禱)する、といった。祖母はヌキ(お椀)やパスイ(祈禱用の箸)、頭のついた煮干、米(あるいは稗や粟)、たばこ、酒、などをお膳に用意した。そしてストーブに対して、イノンノイタクツ(お祈りの言葉)をはじめるのであった。アイヌの神々でも、いちばん威厳のあるのは、アベフチ(火の神様)である。(鳩沢 1963, p.19)

アイヌ語を話し、アイヌ語で唄うだけではなく、祖母はアニミズム的なアイヌの神々の世界に生きていた。そして、家族を思い、祖母は信じる神々に祈禱することで、孫の無事を守ろうとしていたのである。鳩沢はこの祖母の世界観をときに共有しながら生きていたのだ。

「証の空文」の翻訳を行おうとすると、翻訳家はなぜこの孫たちはアイヌ語がわからないのだろうかという疑問に突き当たるだろう。なぜ同じ場所で暮らす家族が、アイヌ語と日本語という別の言葉を話し、またももとは家族の言葉であったであろうアイヌ語を継承することができなくなったのか、なぜ家族内でも翻訳を用いなければならなくなったのか、といった様々な問いが生まれるであろう。

「証の空文」は日本の負の歴史を考える上でも貴重であるし、物語中に描かれる祖母がもつアイヌ語とその世界(文化と置き換えることもできる)は日本の複数の言葉たちを考える上で、大きな意味をもつ。逆に言えば、日本語がわからなかったとしても、この物語の背景にある日本の歴史はもちろんのこと、日本におけるマイノリティ言語の問題、アイデンティティや民族差別の問題を理解していなければ、到底、本当の意味でこの小説を翻訳することはできないのである。

「証の空文」を他言語へと翻訳する試みは、マイノリティ言語への気づきをうながし、またこのような言葉を話す者たちが受けた文化侵略について学び、認識する契機になるのである。

3 最後に

ここまで論じてきたことで、テキスト翻訳だけを見ていても、翻訳という行為がいかに難解で、言語だけを介していればできるというような単純なものではないということが理解いただけたのではないだろうか。

人間の言葉をつくりあげてきた世界、言葉に映し出されている世界があり、また話者が身体化している文化がある。それらは文法や単語を覚えるだけでは到底知ることのできない世界である。もちろん、言葉を学ぶことはその大きな一歩となるが、翻訳という行為を真摯に行うためには、言葉を学ぶだけでは全く十分ではなく、教える側も翻訳を取り入れる際には「翻訳とは何か」ということを、広い観点から学んでおく必要があることは明らかであろう。

このためには、言語教育の中で、翻訳を教えるのであっても、教員が Translation Studies の基本を学んでおくことは非常に有益であろうと思われる。

注

¹詳しくは佐藤＝ロスベアグ（2011）を参照されたい。

²この質問をした院生に許可を得て、本エピソードを掲載した。実際のやり取りは英語で行われた。

<参考文献>

- 井上健（2012）『翻訳文学の視界—近現代日本文化の変容と翻訳』思文閣出版。
佐藤＝ロスベアグ・ナナ（編）（2011）『トランスレーションスタディーズ』み
みず書房。
鳩沢佐美夫（1963）「証の空文」『遺稿 沙流川』草風館。
鳩沢佐美夫（1995）『遺稿 沙流川』草風館。
早川敦子（2013）『翻訳論とは何か 翻訳が拓く新たな世紀』彩流社。
ヘルマンズテオ・佐藤＝ロスベアグ・ナナ訳（2011）「翻訳者声と価値」佐藤＝
ロスベアグ・ナナ編『トランスレーションスタディーズ』みみず書房。

翻訳学習者の経験をさぐる

—TS とからめて—

田辺 希久子
神戸女学院大学

本稿は AJE 年次大会の招待パネル「翻訳学と言語教育—複数のことばたち」において、「翻訳学を使った大学における翻訳教育—実例紹介」と題して行った口頭発表をもとに、2013～2014 年に日本の大学で行った自由回答式アンケートに基づき、現在日本の大学で行われているごく一般的な英→日翻訳の授業にお

ける受講生の経験を探ったものである。分析の結果、(1) 翻訳のイメージは「英語」だが、実際の翻訳体験においては「日本語」が強く意識されること、(2) 翻訳体験において「リサーチ」(背景や単語などの調査) が大きな位置を占めていること、(3) 実際に翻訳を体験して「自分」が出てくること一などが観察された。さらに AJE でのパネルの趣旨に基づき、2014 年に一方の大学で試験的に行った、トランスレーション・スタディーズ (TS) を取り入れた授業の可能性についても言及したい。

1 調査の概要

本稿でとりあげる調査は、2013 年度と 2014 年度に日本の 2 つの大学で行ったもので、翻訳の授業を受講した学生に対する自由回答式のアンケートである。

1.1 対象

アンケートを行った 4 つのクラスは、いずれも大学で翻訳を学ぶのは初めてという大学 2 年生が大半を占め、学生の専攻は英語ないし他の外国語である。クラス規模は以下のとおりである。

A 大学 2013 年度クラス	19 名
2014 年度クラス	21 名
B 大学 2013 年度クラス	26 名
2014 年度クラス	16 名

両大学とも教材はレシピ、マニュアル、小説、絵本、報道記事、ビジネス文書、チラシなどを実際に訳していく演習型授業である。最近の大学向け翻訳教科書を見る限り (田辺・光藤 2007, 2008; 氏木 2010)、多様なジャンルの翻訳演習をとおしてコミュニケーション志向の翻訳を学ぶのが、大学における翻訳授業の一般的傾向といえ、いずれのクラスもごく標準的な授業といえよう。

1.2 アンケートの設問

本アンケートは、もとは英語学習者における動機づけの調査を企図してデザインされているため、「学習者の経験の分析」という本稿の目的とは必ずしも合致しないが、(1) 翻訳に関して述べた回答であることに変わりはないこと、(2) 性格の異なる 4 つの質問の組み合わせから分かることもあること一から、既存の設問 (以下) をそのまま使用した。

- 質問 1 翻訳の授業を受けてみて、翻訳に対してどのようなイメージを持ちましたか? (翻訳に対するイメージを聞く質問)
- 質問 2 翻訳の授業を振り返ってみて、伸ばすことができたと思うところがありますか? (翻訳授業の効果に関する質問)
- 質問 3 翻訳の授業を振り返ってみて、やってみてよかった素材、取り上げてほしかった素材はありますか? (好きな教材についての質問)
- 質問 4 翻訳課題をこなすとき、あるいは壁にぶつかった時、どのような方法を使いましたか? (問題解決の対処法)

1.3 分析のツール

本稿は計量テキスト分析のツールである khcoder というソフトを使用する。計量テキスト分析とは、コンピュータ利用により可能になった大量データの分析（テキストマイニング）と、社会科学における伝統的な内容分析を組み合わせた手法で、量的分析（自動化された分析）と質的分析（データを読むこと）の長所・欠点を補完するアプローチである（川端・樋口 2003; 樋口 2014）。

2 自由回答の結果

2 大学 4 クラスから得た自由回答を合計すると、総語数は 12,458 (5081)、異なり語数は 1,370 (1,094) だった¹。以下に 10 回以上出現した語の一覧を示す。

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
翻訳	194	持つ	22	小説	13
訳す	97	人	22	新聞	13
日本語	92	力	22	探す	13
思う	81	言葉	20	旅行	13
調べる	70	字幕	20	ガイド	12
考える	54	辞書	20	楽しい	12
読む	53	分かる	20	言い回し	12
英語	51	意識	19	参考	12
文章	47	時間	19	聞く	12
自分	41	能力	19	違う	11
表現	40	イメージ	18	語彙	11
意味	39	訳	18	使い方	11
必要	39	意識	17	書く	11
単語	36	特に	17	場合	11
絵本	35	ネット	16	心がける	11
難しい	34	英文	16	前	11
使う	32	学ぶ	16	他	11
インターネット	31	見る	16	伝える	11
文	28	知る	16	部分	11
原文	26	面白い	15	文化	11
リサーチ	25	作業	14	文法	11
授業	25	正しい	14	実際	10
理解	25	読み手	14	説明	10
映画	24	内容	14	想像	10
感じる	24	背景	14	多い	10
知識	24	英	13	文脈	10
記事	23	興味	13	方法	10
直訳	23	検索	13		

Table 1 全回答の頻出語

Table 1 は 4 つの質問の全回答から抽出したが、実際には各質問は内容が異なり、別々に分析すべき性質のものである。しかし個別の質問では総語数が約 1800 ~ 4000、異なり語数が約 400 ~ 600 と、データのボリュームが低下するため、本稿では回答全体の分析と質問別の分析を並行して進める。

3 考察

ここでは頻出語の中から、3つの特徴を取り上げて考察する。すなわち(1)「日本語」と「英語」、(2)「リサーチ」、(3)「自分」である。

3.1 「日本語」と「英語」

「日本語」と「英語」は頻出語の中でも目立って出現数の多い語である。Table 1にある「英文」および「英語」を合わせて「英語」というコードとして比較すると、「日本語」と「英語」の出現数は85対61と「日本語」が優位だった。日本では翻訳が英語学習の一環として行われていることを考えると、日本語の優位は意外ともいえる。

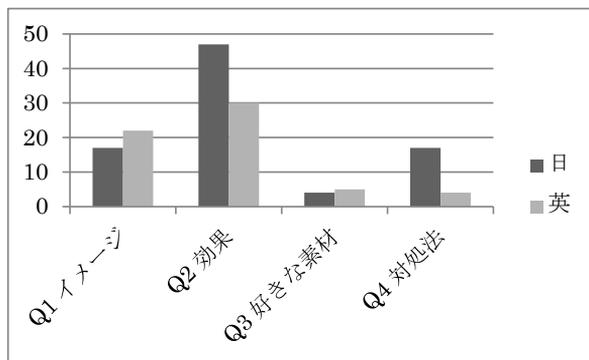


Fig.1 質問ごとの「日本語」と「英語」の出現数

さらにQ1~4の質問別で集計したところ、それぞれの質問ごとに、「日本語」と「英語」の関係が異なることがわかった(Fig.1)。翻訳全体のイメージ(Q1)や「好きな素材」(Q3)では「英語」がまさっている

が、感じられた「効果」(Q2)や問題解決の「対処法」(Q4)では「日本語」のほうが大きく意識されている。これは期待値として「英語」が大きく、実際にやってみると「日本語」が強く意識されることを示しているようだ。スコパスが意識されるコミュニケーション型の現代の翻訳観のもとで、実践演習で目標言語(この場合は日本語)が強く意識されるのは首肯できる。一方、翻訳の「イメージ」が英語であるのは英語ブームの日本ならではの現象なのかもしれない。

日本以外の地域や日→英という逆方向の翻訳ならどうなるのかを検証する必要があるだろう。

3.2 「リサーチ」

頻出語リストには「調べる」(70)、「インターネット」(31)、「リサーチ」(25)など、リサーチに関する語の出現が非常に多い。まず出現頻度10回以上の語(Table 1)から、「リサーチ」というコードとしてまとめられそうな語を、元の回答の文脈を参照しながら選んだ。組み入れた語は、リサーチ/インターネット/ネット/検索/調べる/知識/辞書/辞典/背景/探す/参考/聞く/固有名詞/情報/友達/相談/専門/例文/意見/使用/サイトである。「リサーチ」以外にも複数の語をまとめて14のコードを作成し、全回答における出現数を比較したところ、「リサーチ」が最も頻出するということがわかった(Table 2)。

	出現数	出現率
日本語	79	15.52%
英語	56	11.00%
ジャンル	112	22.00%

リサーチ	160	31.43%
単語	58	11.39%
楽しい	47	9.23%
能力	37	7.27%
読解	36	7.07%
正確性	20	3.93%
文脈	21	4.13%
読み手	22	4.32%
文法	16	3.14%
コード無し (文書数)	107 509	21.02%

Table 2 全回答におけるコードの出現数

次に、上記 12 のコード間の共起関係をクラスター分析によってみると、「リサーチ」と「単語」の結びつきが強いことがわかった。このように、「リサーチ」というコードの出現数の多さは注目すべきだが、今回のデータに限れば「単語」とのつながりという、比較的常識的な相関しか観察できなかった。

3.3 「自分」

本稿の目的が学習者の経験を探ることであるとすれば、41 回と出現頻度が高く、また「日本語」「英語」「意味」「表現」のように翻訳特有と思われる語ではないもの、すなわち「自分」「思う」「調べる」「考える」「読む」といった語がリスト上位にあることが目を引く。このうち「思う」はほぼすべて「～と思う」などのヘッジ的表現であり、また「読む」は読者志向ないし原文志向を示す翻訳特有の語とみなされることから、これらを除外すると、残るは「自分」「考える」「調べる」である。「調べる」は前項の「リサーチ」で述べたので、ここでは「自分」と「考える」について、特に「自分」を軸として観察する。

- (1) 「自分」の出現傾向について、kxcoder で関連語を検索した結果、回答全体では明確な特徴がみられなかった。
- (2) もう一つの特徴は Q4 における「考える」との関連である。「考える」は「～と考える」などのように深い意味のない例もあるが、それはごく一部で、reflect on の意味が圧倒的に多く、内容も重いと判断できる。Q1 では出現 14 回のうち「自分」との共起 3 に対し、Q4 では 11 のうち 4 であり、イメージ (Q1) より対処法 (Q4) において「自分が考える」意識が高まると考えられる。つまり、実際に翻訳をやり、問題にぶつかって初めて自主性が高まると推測できる。
- (3) 以上の観察をより明確にするため、回答文そのものを読むと、Q1 (イメージ) や、Q2 (感じられた効果) では、自分自身の欠点や役割を意識した回答が多く、Q4 (対処法) では「自分ならでは」「自分なら」といった、自分を肯定的に見て自分を表に出す回答が見られた (例として「グループの仲間に、あるいは他の友人に積極的に質問しに行き、さらに先生に尋ねて自分なら[では]の考えをブラッシュアップした」(Q4)、「参考になる物 (絵本、旅行ガイドブック、インターネットサイト等) を最大限に活用しながら自分らしい訳を作成した」(Q4)、「日本語で読む時、自分ならどんな文章を読みたいかを考える」(Q4) 等)。

これらの例から、Q4 では「自分」が主人公になり、しかも「考える」という

サイズも小さすぎる。しかし翻訳授業のごく一般的な、いわば定石ともいえるカリキュラムに対して、TSを取り入れることの潜在的可能性を見出すきっかけとなるかもしれない、今後も追跡していきたいと考えている。

4 まとめ

以上、翻訳授業を受講する大学生の経験を、アンケートの自由回答から探った。日本の2大学の英→日翻訳の演習授業においては、起点言語（英語）より目標言語（日本語）が、特に翻訳タスクを直接的に経験する場面で強く意識されることがわかった。また「リサーチ」というコードが回答全体において圧倒的な存在感をもっており、学習者にとって翻訳タスクにおけるリサーチ（インターネットの検索や辞書などのテキストの背景調査）のインパクトが大きいことが看取できた。さらに、出現頻度が高く、学習者の経験という面から重要と思われる「自分」という語の分析からも、直接的な翻訳経験において「自分」が主人公として前面に出てくる様子が観察された。最後に、サンプルサイズの小ささから断言はできないものの、トランスレーションスタディーズ（TS）の導入を行ったクラスで「自分」で「考える」がキーワードとして観察され、TS導入が自立学習へのきっかけとなりうる可能性について示唆した。本調査はサンプルサイズの量と多様性において不十分であり、調査対象を広げて量と多様性を確保することで、さらなる推敲を加えることを今後の課題としたい。

注.

- 1 語数に付した括弧内の数字は、kxcoder において分析に使用した語数である。Kxcoder ではすべてが平仮名のみからなる語など、一般的な語は最初から分析から除外することができる。本稿の分析では、平仮名だけの語でも分析に組み入れるべき語は分析に含めるよう調整している。
- 2 シュピリ作の児童文学 *Heidi* (1880) は『アルプスの少女ハイジ』として知られ、野上弥生子、竹山道雄、矢川澄子、池田香代子を始め、繰り返し訳出されている。日本の大学生の多くはアニメをとおしてこの作品を知っている。翻訳家ごとに違いがみられるほか、絵本やアニメなどの翻案では本質的メッセージさえ変化し、訳文比較によって異文化接触がもたらすダイナミックな相互作用に触れることができる。

<参考文献>

- 氏木孝仁編著、氏木道人・中村真佐男・持留浩二著（2010）『翻訳入門英日編改訂新版』大阪教育図書。
- 川端亮・樋口耕一（2003）「インターネットに対する人々の意識—自由回答の分析から—」, 『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第29巻, pp.163-181.
- 樋口耕一（2014）『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版。
- 光藤京子・田辺希久子（2007）『英日英翻訳実践トレーニング』マクミランランゲージハウス。
- 光藤京子・田辺希久子（2008）『英日英プロが教える基礎からの翻訳スキル』三修社。